

ちょうどその時、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことを、イエスに告げる者たちがあった。イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのすべてのガリラヤ人とは違って、罪人だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」（ルカ13：1～3）

「ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたこと」が歴史的にどんな事件であったかは分からない。ただ、下記のようなことはあった。ピラトはエルサレムに水の供給が必要であることを知り、水道の建設を提唱した。その工事費用をエルサレム神殿に献げられたものから、賄おうとした。ユダヤ人たちは神殿のお金を用いることに反対し、反乱を起こした。民衆は神殿をユダヤ民族の信仰の魂の拠り所としていたからである。ピラトはローマ兵を動員し、反乱する民衆を強引に鎮圧した。その時、多くのダヤ人たちは無残に殺害された。その中に、ガリラヤ人が混ざっていた可能性はある。

ある人たちが、主イエスに弟子たちと同じガリラヤ人がピラトによって殺されるという災難に遭ったと告げた。それを聞いて、主イエスは、「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのすべてのガリラヤ人とは違って、罪人だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」とお答えになった。この返答は、ガリラヤ人が不遇な殺害に遭ったのは、彼らが罪を犯した罰ではないかという問いが、主イエスに投げかけられたことに対してである。

「また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人」ということも、歴史的にどんな事件であったかは分からない。ピラトの水道建設工事の途中、シロアムの塔が倒れ、18人が事故死したということかも知れない。理不尽な殺害と不慮の事故死の二つに関し、民衆は彼らの罪が原因ではないかという議論をしていた。この議論には、ユダヤ人は、罪を犯した者は裁きの罰を受けるという教理を当然としていたことが背景にある。

旧約聖書のヨブ記は、この問題をテーマにしている。ヨブはサタンによって、全ての財産を奪われ、10人の子どもを一瞬に失った。更に、ヨブの体を悪性の腫物が覆った。苦悩の中で、体をかきむしりながら、ヨブは灰の中に座った。その時、3人の友人が来て、お前の罪がこの災いを招いたと言う。エリファズはヨブに、「思い起こしてみよ。罪がないのに滅びた者があったか。正しい人で絶ち滅ぼされた者がどこにいたか」と言い寄る。これがユダヤ人の罪と災いに関する認識である。

因果応報で、災いは悪しき罪の罰であるとする。この考えに対し、主イエスは、ガリラヤ人が災難に遭ったのは、罪人だったからではないと明言された。この言葉は不遇な死を遂げた人々と遺族に解放をもたらした。そして、主イエスは「言うておくが」と傾聴を促し、「あなたがたも悔い改めなければ、皆と同じように滅びる」と言われた。悔い改めとは悪事を悔い、改心するということではない。心のあり方を方向転換すること、即ち、神を真っ直ぐに信じることである。神に心を向けなさい。そうしないと、あなたがたも滅びる。神を信じれば、理不尽な死、不遇な死に遭遇しないということはない。しかし、それらの死は罪の結果ではなく、神の支配の下での死であるから、滅びることなく、神は神の下なる命へと召し上げてくださる。生と死を神に委ねることが悔い改めである。